

第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

太陽の光に煌めくビジョン

沖縄県 竹富町立船浦中学校 三学年

山口 奏空

七月三十一日、早朝。

「ピ。ピ。ピ、ピーーピーー」

カムリワシの澄みきった朝一番のさえずりで、私は深い眠りから目を覚ます。寝ぼけ眼を擦りながらベランダに出てみると、一瞬で私の脳は動きだす。西表ブルーに輝く珊瑚礁の海。ねっとり大気が絡みつく、鬱蒼たる翠緑のジャングル。極彩色に彩られ、亜熱帯に咲き誇る花。漆黒の夜の世界から一変し、太陽の光を浴び色彩を取り戻した大自然は、たとえようもなく美しい。

「今日も元気だ。」

私は、ぼつりと眩き安堵する。しかし、朝っぱらから憎たらしいほど容赦なく照りつける陽射しは、私の肌をジリジリと焼き焦がす。「照り過ぎだ。またハードな一日が始まる。」と、ため息をつきそうになるのを思いとどまり、覚悟を決め登校することにした。

今より遡ること十五年、七月三十一日。

微かに響く。千グラムほどの体で振り絞る、この世界への私の第一声。その将来は危ぶまれ、最も深刻だったのが視覚だ。だが、小児科、眼科等の医療チームの方々のお陰で視覚は徐々に発達し、今では嘘のように、豊かな色彩に心を弾ませる中学生へと成長している。幸いにも、病気、傷害や死亡などを保障する生命保険も準備できた。未来を支える保険には、一生加入できないと思いはしても待ち望み、ようやく得られたものの真価は計り知れない。だからこそ、奇跡的に手に入れたこの目とこのお守りを、私は大切に持ち続けたい。

天頂に太陽がある頃、私は脱兎の勢いで学校から帰宅し、転げるように自室に飛び込んだ。それは、級友と将来の進路が話題となり、突然一抹の不安が頭をよぎったために起きた。私がめざす職業は、尊い命を守る医師。合格番号を探す受験生の如く、心臓が早鐘を打ち、医学部がある大学のホームページを開いた。不安は的中。その多大な学費に愕然とする。ひとり親の母は知っているのだろうか。恐る恐る尋ねてみると、ケロリとした顔の母。

第55回中学生作文コンクール

「あら、大丈夫よ。医学部の学費なら生命保険で準備してあるから。そんな心配よりも、あなたが今やるべきことは何なのかわかっていてるでしょ。」

耳が痛い。くるりと踵を返し自室へ逃げたが、清々しい風が吹き抜け、鈍色の心はみごとに晴れ渡る。母にはそつと心の中で感謝し、はたと気がついた。生命保険で備えてくれたのは、身体の保障だけではないということに。

学資準備のための生命保険。子や孫の将来を見据えて用意するもの。その子が大学などへ進学する際、夢を叶えるための選択肢を広げる。一方、個人年金保険は、第一線を退いた後の生活にゆとりを生みだす。身体を保障する保険と貯蓄目的の保険では、どちらが欠けていても不都合が生じるだろう。例えば、身体の保障だけを手厚くすれば、人生の分岐点で必要な資金を確保できないかもしれない。逆に、学資や年金ばかり準備しているのでは、重大な病気を患った時などに、せつかく積み上げた貯えを取り崩してしまう可能性がある。さらに両者が揃えば、生命保険は太陽と似かよった役割を担うとも言える。ときに、体を壊した者へ、光を注ぎ再び立ち上がるための糧となり、また未来の扉に向かい歩む者へ、夢を彩り煌めく光の道標となる。やはり、太陽が全能であるのと同様に、生命保険もバランスを考慮することで備えは万全となるのだ。

ふと面を上げると、大きく西に傾く太陽がいた。私は走る。陽光が導く岬へと。煌めく光。夢。私は、私が望むビジョンをはっきりと視覚に捉えた。岬からの眺望は紅に染まり、「よし。明日はもつとカンカン照りだぞー。」と言わんばかりに、真っ赤な顔がぐんと膨らみ揺らいだ。やがて、明日への英気を養うべく、紅に火照る顔は灼熱と共に、「ジュワー」と、南国の水平線にクールダウンした。